

日本劇作家大会2014 豊岡大会
コウノトリ新人戯曲賞 候補作品

さ わら こま ち

『寂び藁の小町』

モチーフ 観阿弥作 謡曲『卒塔婆小町』
作 山本タカ

これは、老婆(女)と、作家(男)の二人芝居である。
夜。午前二時頃。ひっそりと静まり返った温泉旅館のロビー。奥に麦わら
細工の箱が展示してある。

ロビーは麦わら細工を照らす白熱灯と、月灯りのみにより、ほの明るい。

ベンチに腰をかけ、浴衣にて煙草を吸う若い男。テーブルには徳利と猪口が
あり、彼がしばらくの間、ここでひとり晩酌をしていたのが伺える。

紫煙を吐きながら、大谿川に頭を垂れて揺れる柳を眺める男。煙草を口に
やる以外は、まるで死んだ様に動かない。下ろした右手より、ゆらゆらと
狼煙が上がっている。

そうして、奇妙に歩みの遅い時間が流れた後、男は煙草の火を消し、酒を
注ぐ。しかし、それが最後の一杯なのだろう。猪口をぐいと煽り、空のと
っくりを振る。

所在無げにロビーをうろつく男。やや覚束ない足取りに、酔いの回りが見
て取れる。

やがて男は、吸い寄せられる様にして、麦わら細工の元へ行く。しばらく
見入った後、男はそれに触れようとゆっくりと手を伸ばす。突如、

声　　美しゆう御座いますよう。

廊下の先、闇の静寂より、老婆が現れる。

女中の格好をした、白髪頭の醜い老婆。

作家 ……。

老婆 (箱を見やりながら)美しゅう御座いましょう。

作家 あ、こちらの、方ですか？

老婆 ええ。

作家 すいません遅くまで。……起こしちゃいました？

作家、晩酌の跡がそのままであることに気付き。

作家 あ。

老婆 ……酔っておられるようで。

作家 (申し訳なさに、笑う)「ごめんなさい、すぐに。(テーブルの上にあるものを片付けようとする)

老婆 作家様で御座いますよう。

作家 ……ええ。

老婆 いいものは、見つかりましたかな。

作家 いいもの？

老婆 ええ。話の種は。

作家 ああ、まあ。……あの、どうして。

老婆 狭い温泉街で御座います。噂はすぐに。

作家 そうですか。いや参ったな。

老婆 死人が、うろついておると、皆笑っておりました。

作家 死人？

老婆 ええ。

作家 僕がですか？

老婆 あなた様がで御座います。

作家 ……何ですか、急に。え？僕のどこが死人なんです。

老婆 どこが、と申し上げればキリは御座いませんが。もし、あなた様が生きておられるのなら……浴衣は左前には着ないものです。

作家、自分の浴衣の着方を確かめ、慌てて右前に直す。

作家 ……失礼。

老婆は、作家に目もくれず、じいっと麦わら細工の箱を見つめている。
作家、新たな煙草に火をつけて、一息吸い、吐きながら老婆の様を伺う。

作家 古いんですか、それ。

老婆 ええ。九十と九年前くねんまえのもので御座います。

作家 九十……

老婆 ええ、あの年で御座います。

作家 ……ああ。なるほど、どうりで。

老婆 どうりで？

作家 いや、色褪せてる。

老婆 作家様の目には、これが、醜女しうめにお見えの様で。

作家 醜女、そうかもしれない。誰なんです、そこに貼付けられているのは。

老婆 六歌仙ろっかせんの一人、小野小町で御座います。

作家 はあ。そいつはたいそう……。

老婆 (作家を見る)

作家 たいそう昔は、美しかったんでしよう。

老婆 いいえ。今ほどには。

作家 ……そう。

老婆 ええ。そうでございます。

作家 (息を吸い)じゃあ僕の目が狂っているんだ。僕の目が、その箱を時代がかった、古くさい、錆び付いたものに見せているんだ。
老婆 きっと左様でございますよう。

作家、深く煙草を一すいした後、乱暴に火を消し。

作家 よし、じゃあもう一度、この狂った眼でその箱を見てやろう。

老婆 お止しなさいませ。

作家 どちら、どんな美人がお目にかかれるかな。

作家、老婆の向かいより、箱を覗き込む。二人の顔が、麦わら細工を照らす照明で明るく写る。作家が顔を上げると、老婆の顔が、文字通り目と鼻の先。老婆を見ながら。

作家 僕にはやはり、醜女に見えますがね。

老婆 酔ってらっしゃるからです、作家様。

作家、フンと鼻をならし、顔を離す。

作家 さっきからあなたは、作家作家と言っていますがね。僕は、小説などを書くのとは違うんです。

老婆 では、何をお書きに。

作家 台詞です。芝居の中で語られ、消える言葉を書く。ほら、十年前、いや、九年か。ここで芝居の催し物があったでしょう。ずいぶん大きな。

老婆 ああ。

作家 そのの一環で、僕の作品が、ほら、すぐそこで読まれていたんですよ。

なんとかかっていう偉い劇作家に。覚えていませんか。

老婆 申し訳御座いません、なにぶん年寄りなもので。

作家 そうですか。……ちよつともですか。

老婆 ええ、ちよつともで御座います。

作家 ……じゃあ、僕のものでなくてもいい。何か、そうだな、台詞でも何でも、役者とかその場の雰囲気とか……

老婆 申し訳御座いません。

作家 ……そうですか。

老婆 ……。

作家 そうでしょう。芝居とは元来そういうもんです。花火の様なもんなんだから。そうだ、それでいいんです。

老婆 随分、欲の浅いことで。

作家 幻想を抱いてないだけです。

老婆 それは随分……虚むなしくは御座いませんか。

作家 少なくとも、花火の散る一瞬は本物さ。

老婆 だからこうして、夜ごとに死んだ顔をなさる。

作家 ああ、そうだ。百編ひゃくへんでも死んでやる。

老婆 まだお若いというのに。あなた様に比べたら、この箱の方が随分、生きておりますよ。

作家 まさか、よしてくれ。冗談じゃない。

老婆 冗談なものですか。

作家 僕からしてみればね、それは……卒塔婆そとばだ。卒塔婆で出来た箱に見える。

老婆 卒塔婆からすればあなたが年寄りに見えましょう。

作家 僕が、何故。

老婆 あなた様の方が、九十と九年も多く生きていらっしやる。

作家 この箱より？一体どうということだい。

老婆 卒塔婆は歳をとりませぬ。

作家 全く不思議なものの考え方をするね。え？僕らばかりが歳老いて、卒塔婆はまるで若いままとは。

老婆 それほど不思議に思えますかな。この箱のことを知るものは皆、老いさばらえて死にました。

作家。それを聞き、若々しく微笑む小野小町の顔を見る。

作家、煙草をいじりながら。長い沈黙の後。

老婆 作家様は、作家様でございましょう。

作家 なんです。
老婆 ものを、お書きになる。

沈黙。

老婆 でしたら、この箱のこともわかる筈はずです。

作家 なにか……謂いわれがあるんですか。

老婆 深い、深い因縁いんえんが御座います。

作家 どういうんだい。

老婆 聞いて下さいますか。

作家 話の種にはなるかもしれない。

老婆 どうぞ、お芝居になさって下さいませ。この娘は……本当にいるので

ございますよ。

作家 ……どういうことです。

老婆 文字通りの意味でございます。

作家 生きているんですか。

老婆 どうかお芝居になさって下さいませ。

そう言うと老婆、ゆっくりと箱の蓋ふたをあける。まるで、記憶の蓋が開かれ

たかのように。老婆の語りに併せて、舞台は九十九年前きゅうじゅうゆうくねんまえの旅館へと変わって行く。

老婆（注意深く、ゆっくりと話し始める）この街には、九十と九年前、小町と呼ばれる別嬪べっぴんの女中がおりました。あまりの美しさに、街に住む

男連おとぢ中なかつはもちろんのこと、湯治とうじの客までもが、こぞってその娘を口説い

たものです。その中に、深草ふかくさという名の男がおりまして、麦わら細工の手

だれの職人で御座いました。娘は深草に対して言いました。(次第に若返り、作家に対して)そうだ、百夜、私の元に通ったら、あなたの願いを叶えて差上げましょう。できますこと？

作家 ……。

老婆 この狭い湯の町で、一切を誰にも気取られず。できないと仰るのなら、話はここでお終い。どう？できすこと？

間

作家 ……いいでしょう。

老婆 まあ。

作家 百夜でも千夜でも通ってみせます。

老婆 お芝居が上手なのね。

作家 そう見えますか。

老婆 ええ。まるでこしらえもの。

作家 君の方こそ。

老婆 すぐに色褪せますわ、誓いの言葉も。

作家 そうだろうか。

老婆 ええ、きっと。

作家 どうすればいい。

老婆 こしらえて下さいましな、あなたの手で、決して色褪せることのない、

麦わらの細工を施した桐の箱を。きっとそれが私たちの、忘れ形見になりましょう。

作家 筋書きがそう言うのかい。

老婆 気が進まない？

作家 いや。百日かけて刻み込む、君の美しさを、寂び藁の地張りに。

老婆 百度目の晩、きっと見せて下さいまし。

作家 (老婆の顔をまじまじと見て)……不思議だ、さっきまで皺があんなに。

老婆 皺？皺なんてどこにあって？

作家 狂っているのか、僕の目は。

老婆 卒塔婆は歳ずっと若いまま。

作家 もっと声をよく聞かせてくれ。

作家、たまらず老婆を引き寄せる。

二人睦言を交わす様に。

老婆 行きてはかえり。

作家 帰りては行き。

老婆 一夜、二夜、三夜、四夜。

二人が夜を数えることで、急速に時が流れ出す。

作家 七夜、八夜、九夜……百夜までと通いいて。

老婆 遂に九十九の夜が来た。……なのに、なぜそんなに浮かない顔を？

作家 何故だろう。

老婆 やはりお止しになった方が良かったのだわ。

作家 そうはいかんさ。これが筋書きなんだろう。

老婆 所詮こしらえものの夢。

作家 恐ろしいんだ。

老婆 ……明日が？

作家 いや、それから続く無限の明後日。きっと、明後日は明日程幸せではないだろう。明々後日はもっと。そうして十年、百年経ったら、明日が幸せであった事すら朧になるかもしれない。それが恐ろしい。

老婆 では、お止しになれば。

作家 君は、恐ろしくないのかい。

老婆 いいえ、ちつとも。

作家 何故。

老婆 何故？

作家 だって、明日、君は死んでしまっただろう。

間

作家 明日、四度の激震がこの街を襲う。それは昼時、忙しなく飯の準備を

している時だ。木造の旅館は悉くなぎ倒され、女中達はその下敷き

となる。竈から燃え移った炎で身を焼かれ……。君も例外じゃなかつ

たはずだ。ちょうど九十九年前……。

老婆 それがなんだと言うのです。百編でも思い出の中で死ぬことが、こし
らえものにとっては、ようやく生きるという事でしてよ。

作家 ……しかし。

老婆 さあ、もう行って下さいまし。じきに明日が来ます。

作家 また会えるね。

老婆 きつと。どこかの夢間に。

作家 もう夜が白み始めた。

老婆 早く、灼熱の昼がもうそこまで。

作家が駆け出すと同時に、ドーンという大砲の様な音。断続的に、四回。

1925年、北但馬地震の日である。

火は、屋根から屋根へ飛び移り、街を焼く。

この地震で、倒壊した家屋に挟まれ、多くの女中が命を落とした。

舞台、破壊され、悲鳴と騒音^{そうおん}。様々な情念が作家の内と外へをぐるぐると見舞う。気がつけば、素舞台。舞台上には麦わら細工の箱

作家 君は死んだ。小町よ。僕の目に、もうあの日の君の、たおやかな笑顔を取り戻すことは叶わない。君はずっとずっと遠いところへ行ってしまう。僕の視野の、その外に。

老婆 ここにありますよ。

作家 時は、きっと思い出さえも奪^とうだろう。

老婆 ここにありますというのに。

作家 次第に過去が朧になる。

老婆 見えるものばかりを追いかけて。

作家 また明日が来る。僕らばかりが年老いて。

老婆 卒塔婆はずっと若いまま。

作家 これがもし、芝居だとしたら、僕たちを見ている人がいるのだろうか。

老婆 きっと。ぽかんと口を開けて。

作家 一体何を思うだろう。

老婆 それを知る術は御座いません。

作家 思い出す日もあるのだろうか。

老婆 先のことは解らぬものです。

作家 それじゃあまりに、虚しくはないかね。

老婆 それでも人は、ものをこしらえる。

作家、箱を持ち。

作家 さあ、最後の仕事だ。今、目を入れるよ。小町。

作家、小町の目を入れ、箱を完成させる。

とたんに輝きだす、麦わら細工の箱。

ひやくねん
百年の時を越え、小町と深草の逢瀬^{おうせ}が叶う。

老婆　ご無沙汰ばかり。

深草　随分皺が寄ったものだ。

老婆　醜女に見えまして？

深草　いや、この上なく、美しい。

老婆、麦わら細工の蓋ふたを手に取り、ゆっくりと、閉める。

その瞬間、舞台は午前二時の旅館のロビー。

気がつけば、老婆も作家も消えている。

ただ灰皿より紫煙しえん立ち上るばかり。

(幕)

※作品の著作権は作者に帰属します。無断での上演・掲載・配布は固くお断り申し上げます。